

# 地域の物語に着目した 住民協働事業への参画に関する研究

窪田 愛実<sup>1</sup>・羽鳥 剛史<sup>2</sup>

<sup>1</sup>学生会員 愛媛大学 工学部環境建設工学科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番)

<sup>2</sup>正会員 愛媛大学大学院准教授 理工学研究科生産環境工学専攻 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番)  
E-mail:hatori@cee.ehime-u.ac.jp

地域づくりやまちづくりを進める上では、住民の自発的な参画が重要となる。本研究では、地域の「物語」に着目し、住民の協働事業への受容意識や参画意識との関連を実証的に検証する。この目的の下、既存の物語研究の知見を踏まえて、地域の物語と住民協働事業との親和性認知が当該事業に対する受容意識や参画意識と関連すると共に、そうした親和性認知の効果が地域愛着に依存しているとの仮説を措定した。この仮説を検証するため、松山市東雲公園におけるコミュニティファーム事業を取り上げ、周辺住民104名を対象として、本事業に対する受容意識や参画意識、地域の物語との親和性認知や地域愛着についてアンケート調査を行った。その結果、本研究の仮説を支持する結果が得られ、地域住民による協働事業を進める上で、地域の物語が重要な役割を果たすことが示された。

**Key Words :** *collaborative works, narrative, place attachment, community firm, public acceptance*

## 1. はじめに

### (1) 問題

近年、「地域コミュニティの衰退」の問題が盛んに議論されている。例えば、国土交通省<sup>1)</sup>でも、人口流出や職住分離等の社会状況の変化に伴って、全国各地において、地縁的なつながりが希薄化し、地域コミュニティが衰退しつつあることが報告されている。実際、多くの都市において、郊外化の進展やそれに伴う中心市街地の空洞化が深刻な問題となっている。また、地方部でも、若年層を中心とした人口流出によって、過疎化や高齢化が進み、地域存続の危機に直面しているところが少なくない。

地域が衰退という危機に直面した時、そうした危機的状況を克服する上で、一時的には、周辺地域からの財政支援やボランティア等の人材支援等、“外部”からの支援が有効となる場合が少なくない。ただし、地域の持続的形成を期待する上では、当該地域に住まう住民自身の自発的な取り組みによって地域の活性化を図ることが不可欠であると考えられる。なぜなら、地域住民が地域づくりに主体的に取り組むことなくして、その地域が持続的に維持・発展することは困難であると考えられるため

である。すなわち、地域の持続的発展を実現する上では、地域“内部”の住民自身による自律的活動が何より重要であるものと言える。この点を踏まえると、地域の衰退を防ぐ上では、地域住民自身による地域交流や地域イベント等といった協働的な取り組みを実施していくことが重要であると考えられる。

しかしながら、そうした地域協働事業を実施する上では、住民一人一人が相応の労力を負担することが必要となるが、地域住民がそうした負担を受け入れ、当該の協働事業に主体的に参加するとは限らない。また、住民間の利害対立や意見の対立が先鋭化した結果、協働の取り組みが進展せず、場合によっては地域社会の分断を招く可能性も考えられる。実際に、まちづくりに参加するのが一部の住民のみに限定され、住民間の温度差が見られる事例も報告されている<sup>2)</sup>。

それでは、地域住民は、どのような協働的取り組みであれば、そうした取り組みを受け入れ、主体的に参加するのだろうか。本研究では、この点について、「物語」(narrative)に着目する(なお、本論文では、他文献からの引用の都合等もあり、「ストーリー」「ナラティブ」という用語を併用する)。

「物語」は、歴史学や心理学、社会学、経営学をはじめ

めとする人文社会科学において、人間、あるいは、人間が織りなす社会の動態を理解するにあたって、重要な役割を担うものと見なされている。藤井ら<sup>3)</sup>は、この点を踏まえ、人間、そして社会を対象として、その動態に、公共的な観点からより望ましい方向に向けた影響を及ぼすことを企図した「公共政策」全般においても、「物語」が重大な役割を担い得ると述べている。

以上の認識の下、本研究では、「地域の物語」に着目し、地域住民の協働事業への受容意識や参画意識との関連を実証的に検証していくことを目的とする。

## 2. 理論仮説

### (1) 物語の概念

物語と関連する研究は、これまで歴史学、心理学、社会学、哲学、民俗学、解釈学といった人文社会科学の分野でその蓄積がなされてきたが、土木や建築、都市計画に関わるまちづくりの分野においても、物語に関わる基礎的研究がなされると共に、物語を活用した実務事例が蓄積されてきた。

「物語」の概念に関して、Hinchman & Hinchman は、「出来事を意味に満ちたやり方で結びつける明確な時系列を持ち、一定の聴き手に対して、世界の存在や人々の経験についての洞察を提示するような言説」と定義している<sup>4)</sup>。また、Elliot は、ナラティブの本質的な特徴として、時間性 (chronological)、有意味性 (meaningful)、社会性 (social) という3点を挙げている<sup>5)</sup>。これらを踏まえて、川端<sup>6)</sup>は、人間にとっての出来事の「意味」というものは、「時間的」な順序と「社会的」な文脈をもった言葉のなかに生まれるものであり、その言葉の様式を「ナラティブ」と呼ぶと述べている。

このような特徴は、物語が人間の社会生活において重要な役割を果たすものであることを示している。次節において、物語の役割について詳細に概説していく。

### (2) 物語の役割

Bruner<sup>7),8)</sup>は、人間が物事を理解し思考する認知活動において、「物語」が重要な役割を果たすことを指摘している。Brunerによれば、人間の認識のあり方には、「パラダイグマ的モード」と「物語的モード」の2つの様式がある<sup>7)</sup>。ここで、「パラダイグマ的モード」とは、自然科学に代表される認知・思考形式であり、「記述や説明に関する形式的な数理体系の理念」や「一貫性と矛盾性という必要条件」を特徴としている。一方で、「物語的モード」とは、文学に代表されるような認知・思考の様式であり、「見事なストーリー、人の心を引き付けるドラマ、信じるに足る(かならずしも「真実」でないとしても)歴史的説明をもたらす」といった特徴を有して

いる。Brunerは、これら両者が相互に還元不可能であると同時に、相補的な関係にあると指摘している。

そして、自然科学においては、特定の時間軸を超え、特定の人間という枠を超えたところでなされる「パラダイグマ的モード」が支配的である一方、人間の認知活動全般においては、時間を超越した事例を個別の経験事例へと解釈し、特定の時間と場所へと位置づけ、より直接的に、人間の意図や行為に影響を及ぼしうる「物語的モード」がきわめて重要であることを指摘している<sup>9)</sup>。Brunerの一連の研究以降、心理学の分野において、人間の認知活動における物語の役割や特徴に関する諸研究が蓄積されている。

Gergen & Gergenは、自己を理解する上での物語(自己物語)の役割に着目した「自己物語論」を主張している<sup>10),11),12)</sup>。Brunerが指摘するように、物語的認識が人間にとって根本的なものであるとすると、自己というものも物語的に構成されるものとされている。ここで「自己物語」とは、「個人が自己関連的な事象の関係を時系列にそって説明すること<sup>10)</sup>」を指しており、具体的には、「到達点あるいは、価値を帯びた終点を設定すること」、及びそれに従って「到達点が多少なりとも蓋然的になるように、進行する諸事件を選択・配列する」<sup>11)</sup>という営みを経ることによって、語り手の人生に関わるさまざまな出来事の間の一貫した関連性が生み出され、その関連したストーリーが現在の生に意味と方向性の感覚を与えるものと指摘されている。この様にして、自分が何者であるかについてのセルフアイデンティティが自分についての物語を自分なりに納得のいく形で構成していくことにより成立するのである。

Gergen & Gergenが主張する「自己物語論」を踏まえて、藤井<sup>13)</sup>は、個人が何らかの選択場面での意思決定を行う際、「自己物語」に協和する選択肢を選択する可能性が増進する一方、協和しない選択肢を選択する可能性が低減する傾向にあると指摘している。また、「自己物語論」を拡張して、人々が抱く「ある特定個人はこういう人物なのだ」という「集団物語」や、「ある集団はこういう人々なのだ」という「集団物語」を想定するなら、社会的な意思決定場面においても、物語が多なる影響を及ぼすと指摘している。この様に、人間は、意思決定において「自己物語」や「集団物語」等の「物語」にそぐう選択肢をなす傾向にあることを指摘している。

地域住民が地域における社会的な判断を下す時、「地域の物語」が極めて重要な役割を果たすものと考えられる。特に、地域住民が地域の協働事業を受け入れ、参画するかという意思決定においては、その地域協働事業が地域に根付いてきた物語と親和(一貫・類似・連続)しているかどうか重要な判断基準になり得るものと考えられる。

### (3) 物語による効果条件

この様に、一般に地域住民は地域の物語を考慮して地域協働事業を受け入れるかどうかを判断するものと考えられる。ただし、当然の事ながら、こうした物語の効果は、地域住民がその物語を重視している場合に限られるものと言える。仮に地域住民が地域の物語を重視していない場合には、たとえ地域協働事業が地域の物語と親和していると認知したとしても、その住民は当該事業を受け入れない可能性もあり得る。

以上の点を踏まえて、本研究では、地域の物語が持つ効果の条件として、「地域愛着」に着目する。この点に関して、藤井<sup>14)</sup>は、地域愛着は地域や国家に関わる「物語」と大きく関わることを指摘している。実際に、様々な形で「物語」と「地域愛着」との関連に関する研究も行われている。例えば、宮川ら<sup>15)</sup>は、2010年8月に開通した「かしてつバス導入経緯」に着目した物語を作成し、その物語が地域愛着や公共交通への態度に与える効果を検証している。その結果、物語を読むことによって地域愛着が醸成する効果があることを指摘している。さらに、物語を高く評価した人は、かしてつバスへの愛着が高く、バス利用意図も高いことが定量的に示されている。また、松村ら<sup>16)</sup>においては、場所の記憶を地域で共有することによって、地域への愛着や馴染みが高まることを明らかにし、地域の絆を回復させる上で、物語の伝達そのものに意義があることを論じている。

こうした物語と地域愛着との関連に関する研究から、物語と愛着意識との両者の間には、不可分な関係があることが考えられる。この点を踏まえると、地域に対する愛着意識が高い場合、地域の取り組みが地域の物語と親和しているかどうか、その取り組みを受け入れ、参画するための判断基準となり、一方で、地域に対する愛着意識が低い場合、地域の取り組みが地域の物語と親和しているかどうかは、その取り組みを受け入れ、参画するための判断基準とならないことが考えられる。

### (4) 本研究の仮説

以上の議論を踏まえて、本研究では、「地域の物語」と地域住民が地域の協働事業を受け入れ参画するかどうかという判断との関連及び、「物語」の効果の条件について、以下の仮説を措定し、図2-1に示すような地域協働事業に対する受容・参画意識の心理プロセスを仮定した。本研究は、この仮説の妥当性の検証を主目的とする。

仮説1 地域住民は、地域の協働事業が地域の物語と親和(一貫・類似・連続)していると認知する程、その事業を受け入れ、参画する傾向がある。

仮説2 地域に対する愛着意識が高い人ほど、地域の協働事業を受け入れ、参画するかどうかという判断において、「地域の物語」と「地域協働事業」との親和性認知の及ぼす影響が強い傾向にある。

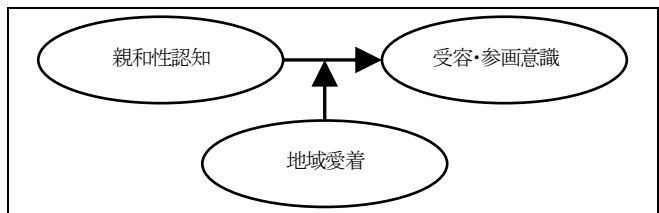


図2-1 地域協働事業に対する受容・参画意識の心理プロセス

## 3. 調査

### (1) 東雲公園未利用地を活用した地域協働事業の概要

松山市東雲町に位置する東雲公園は、街区公園であり、戦後、育苗場として利用されて以降、何十年の間その一部が未利用地として使用されていない状態が続いており、地域住民から有効利用の要望が挙がっていた。そこで、平成25年度より、愛媛大学、松山市立東雲小学校、NPO団体の協働の下、東雲公園未利用地を地域住民と子どもたちが共に野菜を育てるコミュニティファームとして活動する取り組みを開始することとなった。

本取り組みの初年度である平成25年度は、東雲小学校2年生52名が中心となり、地域住民の協力の下、さつまいも栽培に取り組んでおり、児童が畑作業を通じて自然や地域コミュニティとの連携等について学ぶことを目的としている。

### (2) 調査対象者

本調査では、上述した仮説を検証するために、東雲公園周辺の住民から集団抽出法を用いて抽出した住民を対象にアンケート調査を実施した。調査票をポスト投函し、調査票への回答を要請した。その結果、104名の住民の方から回答を得た。回答者の内、男性が45名、女性が59名であった。平均年齢は52.9歳、標準偏差は20.9歳であった。

### (3) 調査方法

本研究では、上述の地域協働事業に対する地域住民の受容・参画意識において、当該事業と地域に根付く物語との親和性認知がどのような影響を及ぼすかを検討するため、「地域の物語」として「東雲公園のこれまでの歴史」に関する簡易物語を描写し、調査票の中に含めた。

「東雲公園のこれまでの歴史」を描写するにあたって、松山市都市整備部公園緑地課及び、東雲公園周辺にお住まいの方4名にインタビューを行った。前者へのインタ

ビューでは、東雲公園が開園するに至った意図や開園してからの管理状況をお聞きした。また、後者へのインタビューでは、東雲公園での記憶や思い出をお聞きした。そのインタビューの内容及び松山市都市公園台帳、池田洋三著の「新版わすれかけの街松山戦前戦後」を基にして物語を描写した。その物語の内容を図3-1に示す。

### 「東雲公園のこれまでの歴史」

東雲公園の土地は、かつて、「かわらけ堀」と呼ばれ、もともと松山城の外堀の一部でした。お堀の水はきれいで、鰻(うなぎ)や雷魚(らいぎょ)などの魚が泳いでいました。そのため子供たちは、釣りをしたり、泳いだりして遊んでいたそうです。

昭和20年(1945年)7月、松山市は戦災をうけて、市街地のほとんどが灰燼(かいじん)に帰しました。戦後から数年経た後、かわらけ堀に戦災時の焼けた瓦礫(かれき)を放り込んで埋め立てました。そして、昭和30年(1955年)、その跡地に「東雲公園」を開設しました。その後、昭和34年(1959年)には、児童遊園地として児童遊具が設置されました。また、現在の東雲公園の一部の土地は、松山市の街路に植えるための街路樹の育苗場として利用されるようになりました。

東雲公園は、開設されてから現在に至るまでの約60年間、多くの方から利用されるとともに、地域住民の方々が中心となり、大切に管理されてきました。毎年8月に行われている東雲校区盆踊り大会は、昔から行われている行事であり、踊りや太鼓などの催しや夜店が開かれ、多くの方々が参加しています。

また、東雲公園及び東雲公園に隣接する土地には、外堀や土塁(どるい)の名残があり、昔をしのぶ唯一の手掛かりともなっています。



整備工事が進む「かわらけ堀」跡の東雲公園  
(「わすれかけの街 松山戦前戦後 池田洋三著」より)

図3-1 東雲公園のこれまでの歴史物語

#### (4) 調査項目

本調査では、上述した東雲公園未利用地で実施及び検討している取り組みを調査対象事業とし、以下の2つの取り組みに対する「受容・参画意識」、地域の物語との「親和性認知」について測定した。なお、調査票では、以下の取り組みを「取り組み①」及び「取り組み②」と記載した。

①東雲公園未利用地を子供たちが農業体験することのできる畑として活用し、農作業を通じて自然や環境、食育について学ぶことのできる空間とする(以下、「地域協働事業1」)。

②東雲公園未利用地を地域協働の畑として活用し、地域にお住まいの様々な方が交流できる空間とする。また、収穫した作物で防災用の炊き出し訓練を行ったり、収穫祭などの関連イベントを開催する(以下、「地域協働事業2」)。

その他、「地域愛着」、「個人属性」に関しても質問した。

#### a) 地域協働事業への受容・参画意識に関する質問項目

調査協力者の地域協働事業1への受容・参画意識を把握するため、受容意識に関して、「あなたは、「取り組み①」に賛成しますか」という質問項目を設定し、「絶対反対」から「絶対賛成」の7段階で回答を要請した。参画意識に関しては、「あなたは「取り組み①」に積極的に携わっていきたいと思いますか」という質問項目を設定し、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の7段階で回答を要請した。また、地域協働事業2に関しても同様の質問項目を設定した。

#### b) 親和性認知に関する質問項目

調査協力者の地域協働事業1と東雲公園のこれまでの歴史との「親和性認知」を把握するため、「「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」と調和した取り組みだと思う」、「「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に即した無理のない取り組みだと思う」、「「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に反する奇抜な取り組みだと思う(逆転項目)」、「「取り組み①」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に照らして違和感のある取り組みだと思う(逆転項目)」という質問項目を設定し、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の7段階で回答を要請した。そして、3つ目と4つ目の項目を反転した上で、これら4項目の加算平均から「地域協働事業1における親和性認知」尺度を構成した(以下、「親和性認知1」)。この尺度の信頼性係数は $\alpha=0.806$ となり、十分な信頼性が認められた。

以上と同様に、調査協力者の地域協働事業2と東雲公園のこれまでの歴史との「親和性認知」を把握するため、「「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」と調和した取り組みだと思う」、「「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に即した無理のない取り組みだと思う」、「「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に反する奇抜な取り組みだと思う(逆転項目)」、「「取り組み②」は、「東雲公園のこれまでの歴史」に照らして違和感のある取り組みだと思う(逆転項目)」という質問項目を設定し、「全くそう思わない」から「とてもそう思う」の7段階で回答を要請した。そして、3つ目と4つ目の項目を反転した上で、これら4項目の加算平均から「地域協働事業2における親和性認知」尺度を構成した(以下、「親和性認知2」)。この尺度の信頼性係数は $\alpha=0.872$ となり、十分な信頼性が認めら

れた。

### c) 地域愛着に関する質問項目

先行研究<sup>17)</sup>で用いられた地域愛着に関する質問項目を基にして、「“お住まいのまち”は、住みやすいと思う」、「“お住まいのまち”にお気に入りの場所がある」、「“お住まいのまち”を歩くのは気持ちよいと思う」、「“お住まいのまち”では、リラックスできる」、「“お住まいのまち”の雰囲気や土地柄が気に入っている」、「“お住まいのまち”が好きだ」、「“お住まいのまち”は、あなたにとって大切だと思う」、「あなたは、“お住まいのまち”に自分の場所がある気がする」、「“お住まいのまち”にずっと住み続けたい」、「“お住まいのまち”は、自分のまちだという感じがする」、「“お住まいのまち”にいつまでも変わって欲しくないものがある」、「“お住まいのまち”になくなってしまおうと悲しいものがある」、「あなたは、“お住まいのまち”に愛着を感じている」という質問項目を設定し、1つ目から12つ目の項目では「全くそう思わない」から「とてもそう思う」、13つ目の項目では、「全く感じない」から「非常に感じる」の7件法で回答を要請した。これら13項目の加算平均から、お住まいのまちに対する「地域愛着」尺度を構成した。この尺度の信頼性係数は $\alpha=.960$ となり、十分な信頼性が認められた。なお、「お住まいのまち」とは、「調査対象者の居住地の小・中学校の校区(学区)の程度の広さ」であることを調査票の中で明記している。

## 4. 結果と考察

### (1) 親和性認知と受容・参画意識との関連(仮説1)

#### a) 親和性認知1と受容・参画意識意との関連

地域協働事業1に関する「親和性認知1」と「受容意識」、「参画意識」との相関分析を行った。その結果を表4-1に示す。この表に示すように、地域協働事業1に関する「親和性認知1」と「受容意識」との相関係数は $r=0.481(p=.00)$ となり、有意な正の相関が認められた。また、地域協働事業1に関する「親和性認知1」と「参画意識」との相関係数は $r=0.265(p=.008)$ となり、有意な正の相関が認められた。

#### b) 親和性認知2と受容・参画意識意との関連

地域協働事業2に関する「親和性認知2」と「受容意識」、「参画意識」との相関分析を行った。その結果を表4-2に示す。この表に示すように、地域協働事業2に関する「親和性認知2」と「受容意識」との相関係数は $r=0.652(p=.000)$ となり、有意な正の相関が認められた。また、地域協働事業2に関する「親和性認知2」と「参画意識」との相関係数は $r=0.389(p=.000)$ となり、有意な正の相関が認められた。

以上の結果から、地域協働事業1と地域協働事業2の両事業において、「地域協働事業」と「地域の物語」が親和していると認知する人ほど、その地域協働事業への受容意識及び、参画意識が高い傾向であると考えられる。この結果は、本研究の仮説1を支持するものと考えられる。

表 4-1 親和性認知1と受容・参画意識との相関係数

	親和性認知1	受容意識	参画意識
親和性認知1	—	.481**	.265**
受容意識		—	.427**
参画意識			—

\*\* $p<.01$

表 4-2 親和性認知2と受容・参画意識との相関係数

	親和性認知2	受容意識	参画意識
親和性認知2	—	.652**	.389**
受容意識		—	.585**
参画意識			—

\*\* $p<.01$

### (2) 地域愛着が親和性認知の効果に及ぼす影響(仮説2)

調査対象者を、地域愛着意識の平均値で2分割し、「地域愛着低群」と「地域愛着高群」の2グループに分けて、「親和性認知」と「地域協働事業1・2への受容・参画意識」との相関係数を比較検討した。

#### a) 地域愛着が親和性認知1の効果に及ぼす影響

「地域愛着高群」と「地域愛着低群」間での、地域協働事業1に関する「親和性認知1」と「受容意識」「参画意識」との相関分析をおこなった。その結果を表4-3に示す。この表に示すように、地域協働事業1に関する「親和性認知1」と「受容意識」との相関係数を比較してみると、「地域愛着低群」では $r=.438(p=.002)$ 、「地域愛着高群」では $r=.495(p=.000)$ となり、いずれも有意に正の相関が認められたが、その相関係数は「地域愛着低群」よりも「地域愛着高群」の方が高い結果となった。次に、地域協働事業1に関する「親和性認知1」と「参画意識」との相関係数を比較してみると、「地域愛着低群」では $r=.187(p=.207)$ と有意な相関が認められなかった一方で、「地域愛着高群」では $r=.300(p=.036)$ と有意に正の相関が認められた。

#### b) 地域愛着が親和性認知2の効果に及ぼす影響

「地域愛着高群」と「地域愛着低群」間での、地域協働事業2に関する「親和性認知2」と「受容意識」「参画意識」との相関分析をおこなった。その結果を表4-4に示す。この表に示すように、地域協働事業2に関する「親和性認知2」と「受容意識」との相関係数を比較してみると、「地域愛着低群」では $r=.574(p=.000)$ 、「地域愛着高群」では $r=.704(p=.000)$ となり、いずれも有意に正

の相関が認められたが、その相関係数は「地域愛着低群」よりも「地域愛着高群」の方が高い結果となった。次に、地域協働事業2に関する「親和性認知2」と「参画意識」との相関係数を比較してみると、「地域愛着低群」では  $r=.271(p=.071)$  と有意な相関が認められなかった一方で、「地域愛着高群」では  $r=.443(p=.002)$  と有意に正の相関が認められた。

以上の結果から、地域協働事業1と地域協働事業2の両事業に関して、地域愛着が高い人において、地域愛着が低い人に比べて、親和性認知2と受容意識や参画意識との関連性が強い傾向にあるものと考えられる。以上の結果は、本研究の仮説2を支持するものと考えられる。

表 4-3 親和性認知1と受容・参画意識との相関係数のグループ間比較

		親和性認知1	
		地域愛着低群	地域愛着高群
受容意識	<i>r</i>	.438**	.495**
	<i>p</i>	.002	.000
	<i>n</i>	47	49
参画意識	<i>r</i>	.187	.300*
	<i>p</i>	.207	.036
	<i>n</i>	47	49

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

表 4-4 親和性認知2と受容・参画意識との相関係数のグループ間比較

		親和性認知2	
		地域愛着低群	地域愛着高群
受容意識	<i>r</i>	.574**	.704**
	<i>p</i>	.000	.000
	<i>n</i>	45	48
参画意識	<i>r</i>	.271	.443**
	<i>p</i>	.071	.002
	<i>n</i>	45	48

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

### (3) 地域愛着と受容・参画意識との関連

以上の分析では、「親和性認知」が地域協働事業への「受容・参画意識」に影響を及ぼすこと及び、「地域愛着」が「地域協働事業への参画と親和性認知との相関係数」に及ぼす影響が認められた。ただし、「地域愛着」は、「地域の協働事業への受容・参画意識と親和性認知との相関係数」に影響を及ぼすだけでなく、「地域愛着」が「地域協働事業への受容・参画意識」に直接的に影響を及ぼしている可能性も考えられる。この点を考慮して、「親和性認知」、「地域愛着」の2要因を説明変数、地域協働事業への「受容意識」、「参画意識」を従属変数としてそれぞれ重回帰分析を行った。

#### a) 地域愛着と地域協働事業1への受容・参画意識との関連

「親和性認知1」、「地域愛着」の2要因を説明変数、

地域協働事業1への「受容意識」、「参画意識」を従属変数としてそれぞれ重回帰分析を行った。その結果を表4-5に示す。この表に示されているように、地域協働事業1への「受容意識」に関しては、「親和性認知1」が有意に正の相関をもっており、「地域愛着」とは有意な関連性は認められなかった。また、地域協働事業1への「参画意識」に関しては、「親和性認知1」が有意に正の相関をもっており、「地域愛着」とは有意な関連性は認められなかった。

#### b) 地域愛着と地域協働事業2への受容・参画意識との関連

「親和性認知2」、「地域愛着」の2要因を説明変数、地域協働事業2への「受容意識」、「参画意識」を従属変数としてそれぞれ重回帰分析を行った。その結果を表4-6に示す。この表に示されているように、地域協働事業2への「受容意識」に関しては、「親和性認知2」が有意に正の相関をもっており、「地域愛着」とは有意な関連性は認められなかった。また、地域協働事業2への「参画意識」に関しては、「親和性認知2」が有意に正の相関をもっており、「地域愛着」とは有意な関連性は認められなかった。

以上の結果から、地域協働事業1と地域協働事業2の両事業に関して、「地域愛着」が「地域協働事業への受容・参画意識」に及ぼす影響は認められなかった。

表 4-5 地域協働事業1に関する受容意識と参画意識の重回帰分析結果

(説明変数)	受容意識			参画意識				
	$\beta$	<i>t</i>	<i>p</i>	$\beta$	<i>t</i>	<i>p</i>		
親和性認知1	.576	**	5.048	.297	*	2.306	.023	
地域愛着	.019		.173	.863		.186	1.480	.142
$R^2$	.220			.085				

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

表 4-6 地域協働事業2に関する受容意識と参画意識の重回帰分析結果

(説明変数)	受容意識			参画意識				
	$\beta$	<i>t</i>	<i>p</i>	$\beta$	<i>t</i>	<i>p</i>		
親和性認知2	.788	**	8.118	.000	4.89	**	3.730	.000
地域愛着	.094		.949	.345	.204		1.528	.130
$R^2$	.439			.169				

\*\* $p<.01$

## 5. 結論

本研究では、「地域の物語」に着目し、地域住民の協働事業への受容意識や参画意識との関連を実証的に検証することを目的とした。その結果、「地域の物語」と「地域の協働事業」が親和していると認知する人ほど、「地域協働事業」を受け入れ、主体的に参加する傾向が

あり、親和していないと認知する人ほど、「地域協働事業」を受け入れず、主体的に参加しないことが示された。そして、地域に対する愛着意識が高い人ほど、地域の協働事業を受け入れ、参画するかどうかという意思決定において、「地域の物語」と「地域協働事業」との「親和性認知」の及ぼす影響が強い傾向があることが示された。先行研究<sup>17)</sup>において、地域愛着が高い人ほど、町内会活動などの地域活動に熱心であることが示されているが、東雲コミュニティファームのような当該地域における新しい取り組みに関しては、地域協働事業への受容・参画意識に地域愛着が及ぼす直接的な影響は認められなかった。これまで実施されていないような地域協働事業を実施、導入する上では、地域の物語と地域協働事業との親和性認知が極めて重要であり、地域に根付いた物語に配慮して協働事業を進めることが大事であると考えられる。

- 14) 藤井聡, 羽鳥剛史, 長谷川大貴, 澤崎貴則: 交通計画における「物語」の本質的意義, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, vol.41, 2010.
- 15) 宮川雄貴, 谷口綾子, 石田東生: 地域の物語が地域愛着に与える影響の検証—かしてつバスに着目して—, 土木計画学研究・講演集, Vol.45, CD-ROM, 2012.
- 16) 松村鴨彦, 尾田洋平, 來田成弘, 楠田勇輝, 平井祐太郎: 場所の記憶の共有化による地域のなじみに及ぼす影響—兵庫県川西市大和団地をケーススタディとして—, 土木計画学研究・講演集, Vol.42, CD-ROM, 2010.
- 17) 鈴木春菜, 藤井聡: 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集, Vol.25No.2, pp.357-362, 2008.

(2014.4.25受付)

### 参考文献

- 1) 国土交通省(2006). 平成 17 年度国土交通白書
- 2) 朝倉はるみ: 観光を切り口としたまちづくりの可能性と限界—阿寒湖温泉のまちづくり事業から (特集 まちづくりの新潮流 地域と診断士が"WIN-WIN"の関係をつくる), 企業診断 54(6), pp.22-25, 2006-2007.
- 3) 藤井聡, 長谷川大貴, 中野剛志, 羽鳥剛史: 「物語」に関わる人文社会科学の系譜とその公共政策的意義, 土木学会論文集, F5Vol.67, No.1, pp.32-45, 2011.
- 4) Hinchman, L.P.and Hinchman, S.K. : Introduction, In Hinchman, L.P.and Hinchman, S.K.(eds.), Memory, Identity, Community : the idea of narrative in the human science, New York : State University of New York, 1997.
- 5) Elliot, J. : Using Narrative in Social Research : Qualitative and Quantitative Approaches, Amazon Kindle edition, London : Sage Publications Ltd, 2005.
- 6) 川端祐一郎, 藤井聡: ナラティブ型コミュニケーションの性質と公共政策におけるその活用可能性の研究, 土木計画学研究, 講演集, CD-ROM, vol.47, 2013.
- 7) Bruner, J: Life as narrative, Social Reserch 54(1), pp. 11-32, 1987.
- 8) Bruner, J: Acts Of Meaning, Harvard University Press., 1990 (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子(訳)「意味の復権 フォークサイコロジーに向けて」ミネルバ書房)
- 9) 浅野 智彦: 自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ, 勁草書房, 2001.
- 10) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Narratives of the Self, In T.R.Sabin & K.E.Scheibe (Eds.), Studies In Social Identity, Praeger, 1983.
- 11) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Historical So-cial Psychology, Earlbaum, 1984.
- 12) Gergen, K. J. & Gergen, M. M.: Narrative form and the construction of psychological science, In Sarbin, T.R. (ed), Narrative Psychology, Praeger, 1986.
- 13) 藤井聡: 意思決定における物語の役割(特別セッション 人間行動と物語)本行動計量学会大会発表論文抄録集 39, 133-136, 2011